



to 不定詞の主語用法と文法指導：  
言語学がもたらす英語教育における課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 函館英語英文学会 公開日: 2025-05-07 キーワード: 作成者: 佐々木, 昌太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000595">https://doi.org/10.32150/0002000595</a>

# to 不定詞の主語用法と文法指導 — 言語学がもたらす英語教育における課題 —\*

佐々木 昌太郎  
(北海道教育大学函館校)

## 1. はじめに

to 不定詞構文についてはこれまで多くの先行研究が存在する。しかし、これらの研究の中心はあくまで主動詞の後ろに現れる to 不定詞の用法 (1a-d) についてである。

- (1) a. He wanted to get free. (Duffley 1992: 19)  
b. I order him to go. (Verspoor 1999: 505)  
c. I tried to kiss a frog, but I couldn't. (Langacker 2008: 439)  
d. He does those things to annoy his mother. (Smith and Escobedo 2001: 553)

これまでの言語学においては (2a, b) のような to 不定詞の主語用法、つまり to 不定詞主語構文に関する研究は十分には行われてこなかった。

- (2) a. To write of male artisans is tautologous.  
b. To win a significant amount of new business would require a big cultural change at the company. (Egan 2008: 100, from *British National Corpus*)

そして、英語教育においても、to 不定詞の文法指導に関する研究は主動詞の後ろに現れる用法に関するものが中心であり (藤井 2009, 谷 2015, 佐々木 2023)、筆者が知る限り to 不定詞の主語用法を中心に据えた文法指導法の研究は行われてこなかった。

以上のことを踏まえると、これまでの学校英語教育では多くの場合「to 不定詞は主語として使用が可能である」と示すことにとどまっているのは当然であると考えられる。つまり、語学教育は言語学の基礎研究的な知見に基づき発展する側面があることを踏まえると、to 不定詞主語構文の英語教育における指導法が確立されないのは言語学における本構文の研究が十分には進んでいないからだとということである。本研究では、「言語学では広く共有されているが英語教育分野では十分に活用しきれていない知見」として「文末重心」を、また「言語学において十分には浸透していなく、英語

---

\* 本論文の査読にあたってくださった先生からは多くの貴重なご意見・ご指摘をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。本稿の一部には令和6年度函館英語英文学会研究発表会における口頭発表「to 不定詞主語の文法指導について」に加筆・修正した内容が含まれています。研究発表会において会場の皆様から貴重なご質問やご助言をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。本論文は JSPS 科研費 JP24K16090 の助成を受けたものです。

教育分野でも活用されていない知見」として本構文の「典型的機能」と「文脈における談話トピックとの関わり」を取り上げ、認知文法的捉え方に依拠しつつ to 不定詞主語構文の文法指導について検討する。

本論文は to 不定詞の主語用法を教える際には、「文末重心」、「典型的機能」、「文脈」に基づいた文法指導が英語学習者の体系的な英文法の学びを可能にし、さらに本構文の使用の動機づけを理解した上での学びを可能にし得ることを主張する。具体的には、「文末重心」の観点から to 不定詞の主語用法に課される制約について文法指導が行われることで、英語学習者は to 不定詞主語構文と文末重心が関わる他の構文との関係を学ぶことで体系的に英文法を学ぶことができると主張する。また、to 不定詞主語構文の「典型的機能」と「文脈における談話トピック」の観点から文法指導が行われることで、英語学習者は使用の動機づけを理解した上で本構文を学ぶことができると主張する。

本論文の構成は以下の通りである。2 節では to 不定詞主語用法の学習指導要領における示され方、また検定教科書における扱われ方を確認する。3 節では to 不定詞（主語）構文に関する言語学分野の先行研究と言語学分野の知見を活用した英語教育分野の先行研究を概観し、本研究において検討するべき課題を確認する。4 節は本論文の主張であり、「文末重心」、「典型的機能」、「文脈」の観点から本構文の文法指導について論じる。5 節は結論を述べる。

## 2. 学校英語教育における to 不定詞の主語用法

現在の日本の英語教育において文法指導に重きを置くと“文法偏重”と批判されそうである（cf. 鳥飼 2018: 13-19; 野村 2020: 207）。しかし、現行の学習指導要領<sup>1</sup>では文法はコミュニケーション能力を支える要素の 1 つとして重視されている。学習指導要領では外国語におけるコミュニケーション能力を身に付けるために育成すべき資質・能力として (3a-c) が示されている。

### (3) a. 外国語（小学校）

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

### b. 外国語（中学校）

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュ

<sup>1</sup> 小学校 2020 年度より、中学校 2021 年度よりそれぞれ全面実施、高等学校 2022 年度から年次進行で実施。

ニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。

c. 外国語（高等学校）

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

(3a-c) からわかるように、現行の学習指導要領では文法（文構造、言語の働き）はコミュニケーション能力を支える要素の1つとして重視されているのである。

それでは本論文のトピックである to 不定詞が学習指導要領ではどのように扱うものとして示されているか確認しよう。中学校、高等学校学習指導要領では文法事項の1つとして (to) 不定詞が記載されているが、to 不定詞の主語用法については明記されていない。中学校学習指導要領では「意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること」(p. 146) とする「文構造」として次の6つの (to) 不定詞の用法が記載されている。

- (4) a. 主語＋動詞＋ to 不定詞
- b. 主語＋動詞＋ how（など）to 不定詞
- c. 主語＋動詞＋間接目的語＋ how（など）to 不定詞
- d. 主語＋動詞＋目的語＋原形不定詞
- e. It＋be 動詞＋～（＋for～）＋to 不定詞
- f. 主語＋tell, want など＋目的語＋to 不定詞

to 不定詞はさらに「文法事項」としても記載されているものの、to 不定詞の主語用法については「文構造」と「文法事項」のどちらにおいても明記されていない。高等学校では「意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること」(p. 164) とされる「文法事項」として「不定詞の用法」が記載されているが、to 不定詞の主語用法については明記されていない。小学校では (to) 不定詞については直接触れられてはいない。このように学習指導要領では to 不定詞主語の文法指導については明確に触れられてはいない。<sup>2</sup>

次に、to 不定詞の主語用法については検定教科書においても十分な説明はなされていないことを確認しよう。本研究では11件の高等学校の検定教科書を調査対象とした。調査対象とした教科書は *MY WAY English Communication I* (三省堂, 2022),

<sup>2</sup> 3.2節でも確認するが、現行の学習指導要領に対応する『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』では、to 不定詞の名詞としての用法の1つとして (i) の例文を示すことによってのみ to 不定詞の主語用法について触れられている。

(i) To learn a new language is difficult.

（『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』：49）

*CREATIVE English Communication I* (第一学習社, 2022), *COMET English Communication I* (数研出版, 2022), *VISTA English Communication I* (三省堂, 2022), *VISTA Logic and Expression I* (三省堂, 2022), *Grove English Communication I* (文英堂, 2022), *MY WAY Logic and Expression I* (三省堂, 2022), *CROWN English Communication I* (三省堂, 2022), *CROWN Logic and Expression I* (三省堂, 2022), *LANDMARK English Communication I* (啓林館, 2021), *Genius English Logic and Expression I* (大修館, 2022) である。これらの教科書のうち、*MY WAY English Communication I*, *CREATIVE English Communication I*, *COMET English Communication I* の3件を除いた8件の教科書に to 不定詞の主語用法について記載があった。<sup>3</sup> これら8件のうち、*MY WAY Logic and Expression I* を除いた7件の教科書では to 不定詞は(名詞的用法として)文の主語として使用可能であるという点について例文などを用いて説明しているだけであった。比較的詳しく説明されている *MY WAY Logic and Expression I* についても「ふつう、文頭に it (形式主語) を置いて、不定詞(真の主語)を文の後ろに移動」(p. 82) するという説明があるだけで、これ以上のことは記載がなかった。したがって、今回調査対象とした教科書においては、to 不定詞主語はどのような状況において使用されるのか等の to 不定詞主語の特徴が明らかではないだけでなく、なぜ文頭に it を置き to 不定詞が後続する構文の方が「ふつう」なのかという点についても説明がなされていない。

それでは、to 不定詞主語構文に関する文法指導における説明は現状のように「to 不定詞は文の主語として使用が可能である」と示すだけでよいのだろうか。本稿の答えは No である。本構文は現在も使用される to 不定詞の用法の1つである。そのため、英語学習者は本構文の存在について知っているというだけでなく、言語使用上の動機づけを理解した上で、他の文法事項とも関連させて体系的に学ぶことが必要である。しかし、現状の検定教科書における説明では、英語学習者は本構文の使用の動機づけを把握することができないだけでなく、他の文法事項と関連させて体系的に学ぶことも出来ない。よって、本構文の文法指導においてはこれらの課題を解決した説明方法が求められる。

本研究では英語教育における to 不定詞の主語用法の文法指導における課題は言語学分野における to 不定詞主語構文の研究に関する課題を背景として考える。次節においては、言語学分野における本構文に関する先行研究(3.1節)とそれを活用した英語教育分野における先行研究(3.2節)を概観し、本論文で検討すべき点を明らかにする。

---

<sup>3</sup> *COMET English Communication I* については、to 不定詞主語を直接扱う記述はみられなかったが、「長い主語の代わりに(形式主語 it)」(p. 136) というタイトルで形式主語 it を文頭に置き、to 不定詞句を後ろに据える用法に関する説明があった。

### 3. 先行研究

#### 3.1. 言語学における to 不定詞

to 不定詞に関しては、これまで Dixon (1984), Quirk *et al.* (1985), Wierzbicka (1988), Langacker (1991, 2008, 2009, 2015), Verspoor (1999), Duffley (1992, 2000, 2006), Smith and Escobedo (2001), Hamada (2002), Huddleston and Pullum (2002), Egan (2008), Smith (2009) などをはじめとした多数の先行研究が存在する。これらの to 不定詞研究においては多様な用法における to 不定詞の使用の動機づけの説明や同じく非定形節として分類される -ing 形との比較が中心的な問題として扱われてきた。具体的には、(5a-c) のように to 不定詞は典型的に未来性 (Wierzbicka 1988: 165; Langacker 1991: 445-446, 2009: 301, 2015: 73; Smith and Escobedo 2001: 553-554; Smith 2009: 370-373)、もしくは潜在性 (Dixon 1984: 590; Quirk *et al.* 1985: 1191; Langacker 2015: 73) が含意されることで使用がもたらされることが指摘されている。

- (5) a. We want/expect/would like the bombs to explode. (Langacker 2009: 300)  
b. John tried to balance the ball on his head. (Dixon 1984: 590)  
c. Mary types all her papers to impress the professor. (Smith and Escobedo 2001: 553)

これに対して、-ing 形については典型的には (6a, b) のように主節と従属節の出来事の間時間に時間的重なり、つまり同時性が喚起されることが指摘されている (Wierzbicka 1988: 60-73; Langacker 1991: 445, 2008: 439; Smith and Escobedo 2001: 556-559; Smith 2009: 376-377)。

- (6) a. She appreciates and enjoys studying linguistics. (Smith and Escobedo 2001: 557)  
b. He resents/tolerates studying mathematics. (Smith 2009: 377)

以上のように、to 不定詞については言語学分野においてこれまで多くの先行研究によって扱われてきた問題であるといえるが、to 不定詞研究の考察の中心はあくまで主動詞の後ろに現れる用法であるといつてよい。そのため、to 不定詞主語については明らかにされていない課題が存在する。例えば、Egan (2008), Biber *et al.* (1999), Duffley (2003) では to 不定詞の主語用法に関する考察がなされている。Egan (2008) はコーパス (*British National Corpus*) から採取した用例を観察し、to 不定詞主語は使用頻度が低く、共起する主節述語も限定的であることを指摘している。また、Biber *et al.* (1999) もコーパス (*Longman Spoken and Written Corpus*) から採取した用例を観察し、to 不定詞主語の使用頻度は低いことを指摘している。しかし、Sasaki (2024: 21) が指摘するように、Egan と Biber *et al.* のどちらもなぜ to 不定詞主語の使用頻度は低いのか、また、共に用いられる主節述語の種類も限定的なのかという点については考察されていない。また、使用される際にはどのような場合に使用されやすいのかという点についても説明されていない。Duffley (2003) についてもコーパス (*Brown University Standard*

*Corpus of Present-Day American English, Lancaster-Oslo/Bergen Corpus*) から to 不定詞主語の事例を採取し、主節述語の分類を試みているが、Egan や Biber *et al.* と同様に、主節述語の種類が限定的である理由や to 不定詞主語の使用頻度が低い理由については説明されていなく、使用されやすい状況についての説明もなされていない。<sup>4</sup>

### 3.2. 英語教育分野における to 不定詞の文法指導

英語教育に関する分野においても to 不定詞の文法指導についてはしばしば論じられるが、考察の中心は主動詞の後ろに現れる用法である。藤井 (2009) ではコア理論に基づき to 不定詞の指導法について実践的報告がなされている。藤井は不定詞と動名詞のコア<sup>5</sup>をそれぞれ「未来志向」、「現在志向」として提示し、このコアを与えたグループと与えないグループにおいて、主動詞に後続するかたちが不定詞であるのか動名詞であるのかについて、推測の正確さと定着において差が生じるのかということについて検証している。しかし、論じられているのは主動詞の後ろに現れる用法についてであり、to 不定詞の主語用法については扱われていない。次に、谷 (2015) は『中学校学習指導要領解説 外国語編』(以下、谷に依り『解説』)において to 不定詞の「名詞としての用法」という名称における問題点を指摘しており、「(非) 定形節」という概念を用いた to 不定詞の指導法を提案している。しかし、『解説』において to 不定詞の主語用法が「名詞としての用法」として取り上げられていることについて触れられてはいるものの、考察の中心は主動詞の後ろに現れる用法についてであり、to 不定詞の主語用法についてはそれ以上のことは述べられていない。<sup>6</sup> 加えて、佐々木 (2023) においても to 不定詞の文法指導法について「方向性」の観点から論じられているが、考察の対象は主動詞の後ろに現れる用法に限定されている。なお、「方向性」については、未来性を1つの方向性のあり方として含めたより広い意味として用いられている。<sup>7</sup> このように英語教育分野においても to 不定詞の文法指導については検討されてきているが、主語用法の文法指導については十分に考察されてきたとはいえない。

本節においては、英語教育分野において to 不定詞主語の指導法は十分に考察され

<sup>4</sup> to 不定詞主語構文の使用における制約に関しては本稿 4.1 節において文法指導の観点から検討するが、本構文の使用頻度が低い理由については Sasaki (2024: 42-45) において認知文法の枠組みから説明されている。Sasaki (2024: 45-49) では to 不定詞主語が共に用いられる主節述語の種類についても論じられているが、本稿ではこの点については議論しない。

<sup>5</sup> 田中・佐藤・阿部 (2006: 6-8) ではコアを次の3点のようにまとめている。1 点目、コアとは「文脈に依存しない [...] 意味を指す」(p. 6)。2 点目、文脈に依存しないコアは「文脈調整を経て、文脈に依存した (context-sensitive) 語義を得る」(p. 7)。3 点目、コアとは用法の最大公約数的な意味であり、語の意味の範囲全体をとらえる概念であるといえる (田中・佐藤・阿部 2006: 8-9)。しかし、コア理論については認知言語学者によって問題点や課題が指摘されており、この点については谷口 (2011: 66-67)、對馬 (2013: 36-37)、佐々木 (2023: 22-25) を参照されたい。

<sup>6</sup> 谷 (2015) は、2012 年度から実施された学習指導要領に対する『解説』について言及しているが、注 2 (2 節) でみたように、to 不定詞主語が名詞用法の1つとして取り上げられているのは現行の学習指導要領の『解説』についても同様である。

<sup>7</sup> to 不定詞構文に関わる未来性が方向性として記述されるという点については Smith and Escobedo (2001: 553-554) や Smith (2009: 371-373) を参照されたい。

ていないことをみた。このことは、言語学分野においても to 不定詞主語については多くの課題があることを踏まえるとある意味当然のことであるといえる。つまり、言語学分野において本構文に関しては十分に明らかにされていないため、英語教育分野においては to 不定詞の主語用法についてどのように文法指導を行うべきか手立てが見つからないということである。上記でみた英語教育分野における主動詞の後ろに現れる to 不定詞の文法指導に関する研究 (藤井 2009, 谷 2015, 佐々木 2023) は言語学分野における先行研究の知見を活用した研究であるといえる。つまり、主動詞に後続する to 不定詞の用法についてはこれまでの言語学の研究によって十分に考察されていることが文法指導の研究における基盤となっているということである。以上のことを踏まえ 4 節では to 不定詞主語の文法指導がどのように行われるべきか検討する。

#### 4. to 不定詞主語構文の文法指導

本節では to 不定詞の主語用法を教える際には、「文末重心」、「典型的機能」、「文脈」に基づいた文法指導が英語学習者の体系的な英文法の学びを可能にし、さらに本構文の使用の動機づけを理解した上での学びを可能にし得ることを主張する。4.1 節では文末重心、4.2 節では典型的機能、4.3 節では文脈の観点から to 不定詞主語構文の文法指導について検討する。

##### 4.1. 文末重心に基づく文法指導

2 節において *MY WAY Logic and Expression I* では「ふつう、文頭に it (形式主語) を置いて、不定詞 (真の主語) を文の後ろに移動」(p. 82) するという説明がなされている一方で、その理由については説明がなされていないことを確認した。しかし、この点については文末重心 (end-weight) から説明される。Swan (2016: §8: 92.1) は (7a, b) よりも (7c, d) の方が一般的によく用いられると述べている。

- (7) a. To practise [sic] regularly is important.
- b. To wait for people who were late made him angry.
- c. It's important to practise [sic] regularly.
- d. It made him angry to wait for people who were late. (Swan 2016: §8: 92.1)

Swan はこの理由を文末重心、つまり語数が多く、込み入った構造は文末に置かれるという仕組み (2016: §25: 267.4) から説明している。このように、文末重心が働くことで、通常は形式主語 it を文頭に置き、より語数が多く複雑な to 不定詞 (句) は文末に置くということである (Swan 2016: §25: 268.1).<sup>8</sup>

(7a-d) のような現象については、単に「形式主語 it を置き to 不定詞を後続させる用法の方が一般的である」と暗記するよりも、文末重心に基づいた文法指導が行われ、

<sup>8</sup> 文末重心については Quirk *et al.* (1985: 1359-1360) も参照されたい。

その理由を理解する方が英語学習者は他の文法事項とも関連させてより体系的に英文法を学ぶことが可能となる。例えば、文末重心が働く現象は(7a-d)に限定される問題ではない。(8a, b)を見てみよう。

(8) a. She plays the violin **very well**.

b. She plays **very well** almost any instrument that you can think of and several that you can't. (Swan 2016: § 25: 267.4)

(8a) のように副詞は通常動詞と目的語の間に置かれることは無いが、文末重心が働くことで(8b)のように両者の間に副詞が置かれることがある (Swan 2016: § 25: 267.4)。to 不定詞の主語用法を教える際に、(8a, b) のような用例も提示し、文末重心に基づく説明が行われることで、英語学習者は(7a, b) よりも(7c, d)の方が自然である理由を(8a, b) のような現象と関連させて学ぶことができる。さらに、文末重心という英語に一般的に働く原則に基づき(7a-d) や(8a, b) について学ぶことで、英語学習者は、これらの事例を超えて、より自然な英語の表現は何かということについても判断することができるようになるのである。以上のことから、文末重心に基づき to 不定詞主語に関する文法指導が行われることで、学習者は英文法をより体系的に学ぶことが可能になるということができる。

このような文末重心に基づいた説明は検定教科書においても記載されるべきである。2 節で確認したように本研究で調査対象とした教科書には文末重心に基づいた説明はなかった。しかし、前述の通り、文末重心に基づく文法指導は学習者の体系的な英文法の学びを可能とする。また、「語数が多くより複雑な構造は文末に置かれる」という文末重心に基づいた説明は少なくとも高校生にとっては十分に理解可能な内容であるといえる。筆者が高等学校において英語を教えていた頃、文末重心に基づいて to 不定詞の主語用法に関する文法事項を教えた経験があるが、ほとんどの生徒が当時の筆者の説明を理解していたと把握している。以上のことから、文末重心に基づいた説明は検定教科書においても標準的に記載されるべき説明であるといえる。

4.1 節で触れた「文末重心」は従来の言語学分野では広く共有されてきたといえる。そのため本節が検討した課題は、「言語学がもたらす英語教育の課題」というよりも、「英語教育が活用しきれていない言語学の知見」であるといえる。4.2 節と 4.3 節では、これまでの言語学では to 不定詞主語構文に対して十分な研究が行われてこなかったことを原因として英語教育において生じる課題、つまり言語学がもたらす英語教育の課題について検討する。また、4.1 節で文末重心の観点から行われた議論は to 不定詞の主語用法に課される制約に関するものであったのに対して、4.2 節と 4.3 節では to 不定詞主語の使用をもたらす動機づけについて検討する。

#### 4.2. to 不定詞主語構文の典型的機能：未来性は通用するのか？

これまで多くの先行研究が指摘するように、主動詞の後ろに現れる to 不定詞の用

法は典型的に未来性（潜在性）を喚起する（3.1 節参照）。このような言語学の先行研究の知見が活用され、未来性に基づいた *to* 不定詞の文法指導が英語教育分野において論じられている（3.2 節参照）。それでは、*to* 不定詞主語構文においては未来性は典型的に喚起されるのだろうか。もし未来性が典型的に喚起されないのであれば、*to* 不定詞主語構文の典型的機能とはどのようなものなのだろうか。そして、本構文に対する英文法指導はどのようになされるべきなのだろうか。

まず *to* 不定詞主語構文は典型的には未来性を喚起しない。Sasaki (2024) はコーパス (*Corpus of Contemporary American English, COCA*) から採取した 322 の事例を分析し、*to* 不定詞主語構文に伴う方向性<sup>9</sup>のあり方に関して一種の多義性が見られる事実を指摘した。(9a-d) は COCA から採取された事例の一部である。

- (9) a. *To live* there as a student requires parental wealth, which is what Ian had.
- b. *To win* against Cancer takes everything you have.
- c. *To believe* in God is different from submitting to God.
- d. *To believe* in this means to restrict the brain to neuro-electrical impulses ...

(Sasaki 2024: 26-34, from COCA)

Sasaki は (9a, b) のような事例においては、不定詞の出来事を実現することに向かう意志が含意されていると述べている。このような不定詞の出来事へと向かう意志は未来性であるといえる。対して、(9c, d) のような事例においては、不定詞の出来事へと向かう明確な方向性は感得されないと述べている。<sup>10</sup>そして、COCA から採取した事例のうち、最も多い用法が (9c) のように *be* が主動詞として用いられる場合であり、全 322 事例中 250 事例 (77.6%) であったと示している。次に多い用法が (9d) のように *mean* が主動詞として用いられる場合であり、22 事例 (6.8%) であったと示している。このことから、*to* 不定詞主語構文は未来性のような明確な方向性を典型的に含意する構文ではないといえる。

それでは *to* 不定詞構文の典型的機能は何かということについてであるが、それは「*to* 不定詞の出来事と述部の同定である」といえる。Sasaki (2024: 46-48) は (9c, d) のような用例において *be* や *mean* は不定詞の出来事に関して定着している我々の知識を記述することで、不定詞の出来事が何であるかを示すために用いられていると述べており、このとは *to* 不定詞が表す出来事を同定すること（つまり、*to* 不定詞の出来事と述部の同定）であるとしている。前述の通り、Sasaki では本構文の用例の 84.4% が *be* と *mean* を主動詞として伴うことが示されており、このことから本構文の典型的機

<sup>9</sup> 注 7 (3.2 節) で確認したように、*to* 不定詞構文に典型的に伴うとされる未来性は方向性として記述される (Smith and Escobedo 2001: 553-554, Smith 2009: 371-373 参照)。

<sup>10</sup> しかし、Sasaki (2024: 33) は (9c, d) のような用例には主体的に捉えられる方向性 (subjectively construed directionality) は伴うと述べている。

能は to 不定詞の出来事と述部の同定であるということができる。<sup>11</sup>

このような本構文の典型的機能については検定教科書においても反映されている。2節で確認したように、本研究で調査対象とした11件の検定教科書のうち、to不定詞主語の用法について記載があったのは8件である。8件の検定教科書のうち、例文が提示されていたのは7件であるが、これら7件で扱われている例文は(10a-g)のように全てbe動詞が主動詞として伴う用法であった。つまり、to不定詞の出来事と述部の同定という本構文の典型的機能を反映する用例である。

- (10) a. To spend a lot of time is the key. (VISTA English Communication I: 49)
- b. To ride a bicycle is fun. (Grove English Communication I: 162)
- c. To read many books is important. (VISTA Logic and Expression I: 82)
- d. To eat vegetables is good for your health. (MY WAY Logic and Expression I: 82)
- e. To know her is to love her. (CROWN English Communication I: 18)
- f. To reserve a flight on the Internet is easy. (CROWN Logic and Expression I: 14)
- g. To read 100 books in a year is my goal. (LANDMARK English Communication I: 182)

さらに、VISTA English Communication Iにおいては(11)のような文脈の中でto不定詞主語構文の用例が扱われており、ここでも主動詞はbe動詞であり、本構文の典型的機能を反映する用法であるといえる。

- (11) Emma: You're a popular animal photographer. You especially enjoy taking cat photos.  
I'd like to know your secret for taking great photos!  
Iwago: Thank you. My secret is to love cats. To spend a lot of time with them is the key. When you understand their lifestyles, you can find chances for wonderful photos. (VISTA English Communication I: 48, 下線は筆者による)

以上のように、検定教科書において扱われているto不定詞主語構文の用例は、本構文の典型的機能を反映した用法であるといえる。

それでは実際に英語学習者に実施されるべき本構文の典型的機能に関わる文法指導

<sup>11</sup> 匿名査読者の方から「同定解釈の機能は、究極的には A (主語) is B (補語) といった be を含む当該構文に備わったものだと考えられる」というご指摘をいただいた。この点については、今後の研究において参考にさせていただきたい。また、「to不定詞自体は、主語であっても目的語、補語であっても、更には形容詞の用法、あるいは副詞の用法であっても、本質的には未来性・潜在性を表すものと捉えていいのではないだろうか」というご指摘もいただいた。この点について、筆者は「to不定詞は(例えば3.1節の(5a-c)のように)典型的には未来性・潜在性を表すものである」という立場をとらせていただいきたい(Sasaki 2022: 8, 11)。また、to不定詞の主語用法については、相対的に頻繁に使用されるbe(またmean)が主動詞として伴う用法においては未来性が明確に感得されるわけではなく、この場合に残存する方向性については「参照点能力に基づく主体的に捉えられる方向性」として認知文法の枠組みから説明される(Sasaki 2024: 33)。

について考察しよう。ここで留意しなければならないのは、同定作用の概念は抽象的であり、全ての英語学習者に有効に働く説明であるとは考えられないという点である。それでも、本構文の典型的機能に関わる文法指導として最初に説明されるべき点は、本構文の多くの用例は主動詞が **be** 動詞であるという点である。3節でみたように **to** 不定詞の主語用法は使用頻度が低く、その中で 70% を超える割合で **be** 動詞が使用されるのであれば、英語学習者が目にする本構文の用例の多くは主動詞が **be** の用法であると予想できる。また、前述の通り本論文の調査の対象となった検定教科書で取り上げられている本構文の用例はすべて **be** 動詞を主動詞とする用例である。そのため、本構文の多くの用例は主動詞が **be** 動詞であるという点については、英語教師側も説明がしやすく、学習者側も受け入れやすいといえる。補足する点としては、同様の用法として **mean** が主動詞として用いられる場合もあるということであろう。

次の段階として、英文法の理解がある程度進んだ英語学習者に対しては、主動詞 **be** や **mean** が伴う場合には「**to** 不定詞の出来事と述部の同定」が行われており、本構文の典型的機能は（未来性ではなく）この同定作用であるという点についても説明されることが望ましい。**to** 不定詞主語構文の典型的機能が同定作用であるという点については、言語学でも広く浸透しているわけではないため、英語教育分野でも活用されてはいない。しかし、単に **to** 不定詞は主語として使用が可能であるという説明をするだけでは、学習者は本構文の存在理由を理解しないまま、文法事項の 1 つとして覚えるだけになってしまう。また、前述の通り、本研究が調査対象とした検定教科書で取り上げられている用例はすべて主動詞が **be** の場合であり、**to** 不定詞の出来事と述部の同定が行われている用法である。そのため、本構文の典型的機能である同定作用は、検定教科書で取り上げる用例を用いて説明可能であるといえる。以上のことから、ある程度理解が進んだ英語学習者に対しては、本構文の典型的機能を明確にした上で、文法指導が行われるべきであるといえる。

### 4.3. 文脈に基づく文法指導

4.2 節では **to** 不定詞主語構文の典型的機能に基づく文法指導について検討した。前述の通り、本構文の典型的機能である同定作用は主動詞が **be**, **mean** の場合である。しかし、実際には、(12a-d) のように **be**, **mean** 以外の主動詞が伴う **to** 不定詞主語の用法は存在する。

- (12) a. *To live* there as a student requires parental wealth, which is what Ian had. (= 9a)
- b. *To win* against Cancer takes everything you have. (= 9b)
- c. *To live* as if no opportunity for restraint or care is too small makes one's love for this tortured planet continuously incarnate.
- d. *To win* at home over Portland without Jalen Rose showed Larry Bird's group just might be primed to make a title run. (Sasaki 2024: 30-32, from COCA)

これらの用法において to 不定詞主語の使用をもたらしている要因は何であるといえるか。

(12a-d) のような用法において to 不定詞句が主語位置に来ることは談話におけるトピック<sup>12</sup>によってもたらされているという主張を見てみよう。Sasaki (2024: 39-41) は典型的機能（同定作用）が伴わない用法に対して、文脈におけるトピックが to 不定詞句とどのように関わるかということについて分析を行った。そして、コーパスから採取した合計 47 の事例のうち、全ての事例において文脈におけるトピックが何らかの形で to 不定詞句に関わっていることを示した。例えば、(13a) の文脈では談話のトピックである *moral relativism* が下線部の to 不定詞句では目的語となっていると述べている。

- (13) a. *Moral relativism* comes with a cost. To live out one's moral relativism consistently requires that they forgo making moral judgments.
- b. I find it hard to believe Akin is ignorant of all this. To believe what Akin said requires more than casual mis-understanding; it requires a willful misreading of the evidence to such an extent that it is dishonest.
- c. *Indiana Pacers*. They continue to establish themselves as the class of the conference. To win at home over Portland without Jalen Rose showed Larry Bird's group just might be primed to make a title run[.] (Sasaki 2024: 39, from COCA)

また、(13b) と (13c) では *to believe Akin is ignorant of all this* と *Indiana Pacers* が談話トピックとなっており、それぞれ to 不定詞句自体 (13b) と（言語化されてはいないが）to 不定詞句の出来事を行う actor (13c) として to 不定詞句に関わっていると述べている。(13a-c) においては、to 不定詞主語構文の典型的機能（同定作用）は備わっていないが、談話トピックが何らかの形で to 不定詞句に関わることで際立ちが与えられ、to 不定詞句が主語として機能しているとしている。<sup>13</sup>

4.2 節で見たように、本研究で調査の対象とした検定教科書で提示されている to 不定詞の主語用法の例文は全て *be* 動詞を主動詞とするものであった。それでは、本構文の文法指導は *be* 動詞を主動詞とするもの（また、同じ典型的機能を果たす *mean* を主動詞とするもの）に限定されてよいのだろうか。本稿は、学習者のレベルに応じて、*be*, *mean* 以外の主動詞が伴う用法に関する文法指導も行われるべきであると考え、to 不定詞主語構文には (13a-c) のように *be* や *mean* 以外の主動詞が伴う非典型的な用法も存在する。本構文の文法指導における説明が典型的機能（4.2 節参照）に関わる

<sup>12</sup> Chafe (1998: 100-101) と Taylor (1996: 208-214) に基づくと、談話トピックとはある談話において焦点化され、その談話が語っているものであると定義される。

<sup>13</sup> 認知文法では主語とはある関係概念において最も高い際立ち (*trajector*認識) が与えられる参与者であるとされる (Langacker 2008: 517, 539)。

ものみに限定されてしまうと、英語学習者は (13a-c) のような *be* や *mean* 以外の主動詞が伴う用法における本構文の使用の動機づけを理解することはできない。言語使用の動機づけの理解は、当該の構文における各用法を適切に使用するために必要である。よって、本構文の典型的な用法を学び、本構文に対する理解をさらに深めようとする学習者には、より周辺的な用法 (e.g., 13a-c) に関する説明も必要になってくる。

(13a-c) のような用例については、典型的機能以外の観点からの英文法指導が必要になるわけであるが、このような非典型的な用例については、文脈におけるトピックが何らかの形で *to* 不定詞句に関わることが使用の動機づけとなっているという点が説明されるべきである。*to* 不定詞主語構文においては談話トピックが何らかの形で *to* 不定詞句に関わるという点については、言語学では十分に浸透しているとはいえない。そのため、英語教育分野でも活用されている知見ではない。しかし、文脈におけるトピックに関する知識を持っていなければ、本構文を不適切に使用してしまう場合が生じると考えられる。また、「*be* や *mean* が伴う用法ではない」、もしくは「そもそも使用頻度が低い構文である」というような理由から、適切に使用できるケースでも使用を避けてしまう、といった状況に陥ってしまう可能性もある。本構文に対してさらなる理解を目指す英語学習者に対しては、*be* や *mean* 以外が伴う用法においては、文脈における談話トピックが *to* 不定詞句に何らかの形で関わる場合であるという点について説明されることが望まれる。<sup>14</sup>

## 5. 結論

本論文は *to* 不定詞の主語用法という実際の言語使用頻度も低く、英語教育でも扱われることの少ない文法事項の指導法について論じた。このような本稿の研究テーマは、コミュニケーションのツールとしての英語を教えることが目的とされる現在の日本の英語教育では、“文法偏重”につながる研究であるという批判を受ける可能性がある。しかし、「英語を学ぶ意義が外国人と簡単なコミュニケーションをとることだけにあるのであれば、近い将来、AI による音声認識、機械翻訳、音声読み上げ等の技術の進歩に伴って英語学習の意義が失われるのは時間の問題」(町田 2023: 140) であるといえる。このような時代の変化は学習者の英語学習に対する価値観にも影響を与えていると推察される。英語を含めた外国語を教える教員は、言語自体に潜む面白さを伝えることができなければ、学習者の外国語を学ぶモチベーションを維持させることはできないだろう。もちろん、本論文で提示した *to* 不定詞主語の文法指導法がそのままのかたちで多くの学習者に英語自体の面白さとして伝わるとは思わない。また、英語の面白さを伝えられる教育が英文法指導に限定されるわけでもない。しかし、本稿が提示した知見が現場の英語教師によってアレンジされ活用されることで、英語

<sup>14</sup> 匿名査読者の方もご指摘されるように、*to* 不定詞主語と談話トピックの関わりについては適格性に関わるテストなどを行うことで更なる証左を示すことが可能である。この点については今後の研究課題とする。

の面白さを伝えられる英文法指導につながることを願っている。

#### 参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman, Harlow.
- Chafe, Wallace (1998) "Language and the Flow of Thought," *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, ed. by Michael Tomasello, 93-111, Lawrence Erlbaum, Mahwah, New Jersey.
- Dixon, Robert M.W. (1984) "The Semantic Basis of Semantic Properties," *BLS* 10, 583-595.
- Duffley, Patrick J. (1992) *The English Infinitive*, Longman, London.
- Duffley, Patrick J. (2000) "Gerund versus Infinitive as Complement of Transitive Verbs in English: The Problems of 'Tense' and 'Control'," *Journal of English Linguistics* 28 (3), 221-248.
- Duffley, Patrick J. (2003) "The Gerund and the *to*-Infinitive as Subject," *Journal of English Linguistics* 31 (4), 324-352.
- Duffley, Patrick J. (2006) *The English Gerund-Participle: A Comparison with the Infinitive*, Peter Lang, New York.
- Egan, Thomas (2008) *Non-Finite Complementation: A Usage-Based Study of Infinitive and -ing Clauses in English*, Rodopi B. V., Amsterdam, New York.
- 藤井数馬 (2009) 「コアを意識させた授業実践から得られる可能性と課題—動詞に続くかたりとしての不定詞と動名詞から—」『主流』(同志社大学英文学会) 第 71 号, 61-85.
- Hamada, Hideto (2002) *Grammar and Cognition*, Kyodo Bunkasha, Sapporo.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin, New York.
- Langacker, Ronald W. (2015) "On Grammatical Categories," *Journal of Cognitive Linguistics* 1, 44-79.
- 町田章 (2023) 『AI 時代に言語学の存在の意味はあるのか?—認知文法の思考法—』ひつじ書房, 東京.
- 野村益寛 (2020) 『英文法の考え方—英語学習者のための認知英文法講義—』開拓社, 東京.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) A

*Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

- Sasaki, Shotaro (2022) “Nonfinite Clauses and the Control Cycle: A Usage-Based Study of to-Infinitive and -Ing Constructions,” 『九州英文学研究』 第 38 号 (『英文学研究』 支部統合号第 14 卷), 1–14.
- 佐々木昌太郎 (2023) 「to 不定詞と動名詞の文法指導に関する考察—認知文法を英語教育に活用する—」 『函館英文学』 第 62 号, 19-35.
- Sasaki, Shotaro (2024) “The Directionality of the *to*-Infinitive Subject: An Analysis Based on the Control Cycle,” 『認知言語学研究 (Journal of Cognitive Linguistics)』 第 9 卷, 18-53.
- Smith, Michael B. (2009) “The Semantics of Complementation in English: A Cognitive Semantic Account of two English Complement Constructions,” *Language Sciences* 31, 360-388.
- Smith, Michael B. and Joyce Escobedo (2001) “The Semantics of *to*-Infinitival vs. *-ing* Verb Complement Constructions in English,” *CLS* 37, 549-563.
- Swan, Michael (2016) *Practical English Usage*, 4th ed., Oxford University Press, Oxford.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導：コアとチャンクの活用法』 大修館書店, 東京.
- Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- 谷光生 (2015) 「中学校英語教科書における to 不定詞の扱い—その不備と今後の改善について—」 『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』 第 1 号, 123-130.
- 谷口一美 (2011) 「応用認知言語学と語彙学習—文法理論を英語教育に活用する (2)—」 『大阪教育大学紀要第 I 部門』 第 59 巻第 2 号, 63-74.
- 鳥飼玖美子 (2018) 『英語教育の危機』 ちくま新書, 東京.
- 對馬康博 (2013) 「英語基本動詞の教材開発論—応用認知言語学からのアプローチ—」 『文化と言語』 第 78 号, 24–74.
- Verspoor, Marjolijn (1999) “To Infinitives,” *Issues in Cognitive Linguistics*, ed. by Leon de Stadler and Christoph Eyrich, 505-526, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.